明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百七十五號

要目

橋松佳話　花圃
春の夕べ　松茶
非情有情　石翁
邪推後家　朧子
ハムレット　笠雪
亡妻の柩　涙花

明治二十七年四月十四日發兌

no. 375
Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百七十五號目録

社説

四月學校卒業の人

徒然草

春の夕(一)松堂

非情有情(二)石翁

一 猿が偕老同穴のおもひ

二 鼠も扶持米を知る

文藝

ハムレット曲中のヲフエリヤを論ず([illegible])

小説

櫻松佳話(花園女史)

第一回 出世のかけ橋

兒籃

邪推深き後家(若松しづ子)

雜録

芝家隨筆(ふみ子)

童蒙婦女子

田舍住居

烈女と淑女

亡妻のひつぎに收むるわが心(長歌)

寄書

基督教主義學校の將來(杞憂生)

普通教育を專らとするか

高等教育を專らとするか

傳道教育を專らとするか

高等科は如何にすべきか

神學科は如何にすべきか

片々

國民の體格、配偶の選擇

聖公會の結婚及び離婚に關する告示

時報

女生入學の許可○頌榮女學校○女子成立學校○大坂高等女學校○相愛女學校○女子部廢止○兩の影響○彥根町立女學校○女學生の洋行○身體發育の東西比較○故桐野利秋氏母堂の逝去

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百七十五號

明治二十七年四月十四日發兌

社説

四月學校卒業の人

年の四月、春の學期をはんぬ。女學校に於ては、卒業の榮を荷ひて郷に歸るもあるべし。小學校に於ては、高等科を卒えまさに他の普通校に入らんとするもあるべし。

惣じて、卒業なるものは、進歩の終末にあらず、新らしき開始第一歩の門口なり。今までは、門内すみなれし家居に安んじ、慣れし仕付けを修むるとを緊要とせしのみなれど、之よりは、景情まつたく異なりたる別世界に入り、從來かつて經驗せざりし新狀態と調和せざるべからず。左れば、卒業の期は、新事業をはじむるの合圖にして、正に戰場にむかふ出陣の時なりとす。

女學校の卒業生、其のふるさとに歸らば、風景に昔しを忍ぶと共に、人事に新らしきとをのみ感ずべし。時の流行は、意外の事にて、評判の種も一々、思ひの外の者のみなり。智識、習慣の進歩、かくほどとは、夢にも知らず、人生は、抑そもかゝる調子にて相ひ濟むものかと興歎の外なし。哲學、倫理などの解釋はすべて無用なり、世間は數百年來、たゞ在り來りの儘に時を送り、左したる究屈掛念の入らざるものと見ゆるなり。此に於てか、學問の價値は何ほどぞ、十年の苦學、無益に屬せしかなど歎息する場合もあるべし。然し乍ら、此は、大早計の杞憂なり。

迷ひに色々あれども、學者の迷ひは之を霽らすに容易からず疑りにさま〳〵あれども、學者の疑りは亦た解きにくきものなり。すべて、書を讀み、文字を餘計に覺え、學校の卒業などせし輩らは、兎角、學問と云ふものに活智を縛られ、我から囚人となりて、至つて究屈にくらすものあるものなり。かゝる輩らは、本來、眞との學問をせしにあらず、所云る死せ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し學問の骸を抱きて其醜を覺らざるものなれど、兎角、學者には、此の病弊の附き易きを何如んせん。

普通女學校の卒業生などは、元來、たいしたる讀書講學を爲せしにもあらねば、取わけ、學者としての高慢などは愼しむべき筈なるに、一學校を卒業せしなど言ふときは、俄かに天爵正何位の尊嚴が加わりし如くに感じ、妾はこそ斯てはあるまじきものぞなど自から免許し、兎角、不相應の心構へを立つるもの多し。不所存の至りと申すべし。

學校は、人生の一部分なり。學校のみ、人生を專攷したるにあらず。故に、假令ひ學校に入らざるとも、實際の世間に於て、朝夕、苦勞勉强し、さま〴〵實地の經驗を重ねたるものの中には、敬重すべき生きたる大學者のあるものなり。之は經驗なるのみ、學問にはあらずなど言ふものあらんか。思ひ見よ、學理とは、經驗に外ならず、學問智識とは、たゞ經驗を得るの外なきとぞ。左れば、故鄕の先輩古老の中には、其地の事業、人情、風俗などに對する智識の上より言ひては、目ざましき、大博士あるべし。何んぞ跪まづきて之に謹聽せざるや。お向ふの叔母さん、隣りの娘さん、皆な餘程の經驗を所有せり。之に對して妾はこそ女學生の成れの果て、當世の大智識を懷抱せりなど誇り顏に交際せんものこそ、大の無學者なれ。

卒業女學生、故鄕に歸らば、茲に新らしき學校に入れりと心得べし。ふき掃除、臺所元の手つだひ、親類故舊との煩はしき氣なるつき合ひ、出入奉公人の七面倒なるあしらひ、お寺まゐり、禮廻り、もとのお師匠さまへの勤めなんど、皆な新らしき學科と心得、之に非常なる眞理のこもれるものと信じて、敬重して勉强すべし。惣じて之を馬鹿氣たるものと思ふとなかれ。決して馬鹿氣たるものにあらず。大切なる道理のこもれるものなり。其所以は、追々に分るものなり、初めより分るものにあらず。初めは、只だ輕んぜずして之を重んずるこそ肝要なれ。

扨て、此の覺悟を以て、故鄕從來の習慣を學び、愼しみて其敎ゆる所を研究すれば、久しからずして豁然大悟し、實に實に人生は是なりと覺るの日あるべし。此の覺りを得るの早きは、學校敎育のお蔭にして、さすがは、組織したる學問を學びたるの功德に由るものなり。此に至れば、學校敎育の結果、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

忽まち活返り、書籍文字の靈躍り來つて拍手賞賛すべし。此に至れば、さすがは女學生の末と、人々其のさとりの爽敏なるに感服すべし。女子教育のほまれ、一町村の評判となるべし。小學校卒業の后ちは、わが娘は是非とも女學校とやらに入れたしと所望するもの〻みとなるべし。
之に反し、我は女學校卒業生なりと高慢の鼻を動かし、相變わらず女學生の昔しを裝ほつて、お天馬の奔馳を止めず、區々たる家事、何んかあらん、屑々たる俗情、かへり見るに足らず、知己は、か〻る所ろに居らざる也と申さんほどの氣構にては、到底いつまでも知己はあるまじ。其親々は、或ひは暫らく盲目なるべきも、故舊親戚は、忽まち爪彈きし、女學校の學問とは、か〻るものかと、眉をひそむるの外なからん。
此に至れば、小學校卒業の女兒にして、更めて普通女學校に入るものなぜは、殆んど後を絶つことなるべし。
女學校の卒業生は、女子教育の代表者なり、代言人なり、誤解を世に傳へて、其眞を蔽ふとなかれ。后代の女生をして、入校の幸ひを得せしむるや否やは、眞とに是れ當四月の女學校卒業生が言動如何によつて决す。

つれぐ草

春の夕

其一　松茶

庭の花も咲けり、きのふ都より人も來りぬ、草堂に松の葉のみどりを愛し、裏の田の面の蛙の聲淋しきをきくのみなるも、面白ろからねば、今日は里の乙女子集めて、わが庭を上野墨田によそへ、春の花見もよからむと、妻にはその用意などいひつけて、さて己れ人と共に我門を出づ。
竹の藪影に桃の花咲く道香庵に、今日此頃わび住みする植木屋仙吉といふを、かなめの生垣めぐりて訪ひゆけば、例のをかしき風して迎ふ、今日は都の御客樣もあり、山へ春蘭とりに行くも宜しう御座りましよう、そと野の櫻草から千住堂の川遊びは如何です、晝よりは御庭の御花見とか、それは妙く、仙吉破れ壁より一瓢とり出し、同行三人ふら〱と、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

浮かれてゆくや春の道。

鎮守の前の彌吉の店で、村酒五合に腰のものを満たし、今日は旦那の庭で御花見なれば、チット御出なされと、仙吉がいふに、難有う御座りますとの嚊が言葉、次手に近所の娘共へ傳言頼むといひおきて、我そこを立ちいづれば、やれ店のお初サン、外屋敷のお仙サン、新宅のお豊サン、上の横のおらくサンより、下の種屋のお熊サンまで、嬶が足早にふんまわれるに、今日の松茶園の花の宴、さては村中の大評判となりたるぞ不思議なる。

非情有情

（第一回）山下石翁、記

○猿が存老同穴のおもひ

丹後の山奥に獵師某と云ふものあり。獵に出でて、度々、不思議の猿を見たり。其猿は、何やらん葛籠に似たるものを肩に脊負ひ居るなり。或日、又もや此猿を見とめて好き命親を得たれば、鐵砲を擬して切つて放てば、悲鳴して猿は木梢より瞳と落ちたり。駈け寄りて近づき見れば、手負ひは、苦しきうちに脊の方を見ては號泣し、又天を仰いでは長鳴す。其の聲腸に徹し、何如にも悲しき爲體なれば、そも何ものか葛籠のうちに在ると、さしのぞいて見れば、實に不思議なり、年老ひ、毛脱けたる小さき牡猿、籠の底にシガミ着いてぞ居たりける。扨ては、此が爲めに最期を惜しむかと坐ろに哀れがりて能よく見れば、此の老猿は、足腰の立ぬ片輪なり。そもゝ此を脊負ひたる牝猿の爲めに、父なるか、はた戀しき夫なるか、何にせよ不憫の極みと、落涙を催ふし、口のうちに、失せゆく猿に引導をわたし、汝、決して此の老猿の爲めに思を遺すとなかれ、我引うけてキツト餘命を安んぜしめんと言ひつゝ、死骸もろとも得て歸り、先づ彼の老猿に食物を與ふるに見むきもせず、只だ思ひ出すらん、鳴いてゝ、愁歎するのみ。かくて數日一回も食くらわず、遂に悲鳴して死したりける。獵師は哀れの思ひ禁じがたく、雌の死骸に併せて同じき穴に葬むり、寸志の墓石を建てゝ、一片の香を供し、此日かぎり獵師をやめたりとぞ。

○鼠も御扶持米を知る

新たに家を持ちて夜な〳〵鼠の大騷ぎに困じ果て、鼠をとしの計略も早や詮なしとて殆んど責めあぐみたる新夫婦に對して、經驗ある某の老婦人之に說き聞かすらく、鼠は中々の氣性ものにて、隨分、讐を返すものなり。左れば栗のイガにて穴を塞ぎなぞすれば、遠からず、衣物をかみ、又はわざ〳〵机の上にあがつて大切の書物に溺なぞす。鼠をとしも、初め二三疋は欺かるべきが、其後ち殘黨は彌よ騷動して殊更ら暴れまわるものなり。夫故、猫を飼つて、怨を猫と云ふ迚も敵しがたく見ゆる方に向わしむれば兎に角、人は決して自から鼠の怨をかふまじきものぞ。たゞ、毎夜、皿の中に御飯少し計りをいれて、鼠どのに馳走の献立をなすべし。然するときは、鼠のさわぎは、不思議に止むべし、奇妙と申さんほどのものとぞ。鼠の腹は極々小さきものゆへ、其腹を滿たす丈けの飼料は多くもあらず。寧ろ初めより手なづけべし、益もなき怨恨の情を刺激すべからずとぞ。(或人曰く、鼠輩の小人を遇するも亦た常に此の如くなるべしと)。

妾夢不レ離二江上水一人傳郎在二鳳凰山一。

文藝

ハムレツト曲中のヲフエリヤを論ず

笠 [illegible] 譯

此の論の前半は、眠史子の筆によりて、我雜誌の讀者に紹介せられぬ。今や我が拙なき筆を引いて其の殘稿を物するの已を得ざるに至れり、原文はゼームソン女史が筆になれる者。他日閑を得ば女史が「沙翁曲中の女性論」を次を追ふて譯出す可し。

然れども、ヲフエリヤは其の戀をば誰にも語らず、又全曲中の人物の言の之れに及べる者、一もなしと雖も、彼がハムレツトに對する戀をば何人も疑ふ者なきに拘はらず、ハムレツトがヲフエリヤを戀しやあらずやは今も猶一の疑點として存すること、頗ぶる奇怪なる思あらずんばあらず。ヲフエリヤが公子の戀の切にして、其願を助けんとて、あらゆる天の高き誓をなせしを知るに拘はらず、又ポロニアスが開封せし公子の手簡中にも、ハムレツトは最も烈しき熱意を以て、ヲフエリヤを戀ふ事の最も深きを記せるにも拘はらず、猶此の疑

間は消失せず、且甚しきに至りては、ハムレットがオフェリヤを戀ふ事實を否定せんとする者あるに至れり。我見たる中のハムレットの曲及び公子の性情を論ぜし最佳評の作者の如きも、此の後説に傾きぬ。今此の論は我儕に見當れば、只此の最も貴き評論の緒言のみを左に抄出す可し

吾人此曲を讀むに當りては、恰も彼の强風に吹かるゝ怒濤の如く万想の吾人の腦裏に寄せ來るを覺ふ。沙翁が精神の干滿雨潮の間には、自然の大作用の壯麗こもれり。故に、翁の作を讀むに當りて、其の難解の箇所に於ては、吾人は常に謙遜にして、軟弱の譏を歸すべきは、此の大廣讀者にも比すべき翁の過失には非ずして、全く吾人の心の狹隘なるにあるを確信せざる可らず。思ふに、翁自ら其の詩才の如き、批評の大才を備へたりと假定するも、決してハムレットに關する正しき論評をば作るを得ざりしならん。此の如く理想的の、此の如く現實の存在は單に詩歌の色彩のみを以て、畫かれ得可きに非ざらん。其の曲中の人物が、此の世界及び事件に全く關する時、即ち實在せる物體に關係する時には、恰も其の人物が物質の模型に打込まれて造られたるかの如く、又其の感情を注掛ける物躰と、其の定りたる外形を共有するかの如く、吾人は明かに其の性格を認む。吾人は此の如き場合に於ては、個人の容貌の幻影を見るごとく、個人の精神の幻影を有す。吾人は此の兩幻影を心裡に記し、他人をして此を知らしむるを得可し。然れどもハムレットの如き清純なる、佳麗なる、且玲瓏なる心を言語に上ぼせ得べきや。吾人は、男子の美質を飾る、完全なる自由の藝能を有する、他に秀でたる彼の公子の形貌を、只大凡心裡に畫くを得可し。吾人は確かに、彼が一姿勢、一舉動毎に、未來の王たる可き性質を見認む。

The courtiers, soldiers, scholar's eye, tongue, sword,
Th' expectancy and rose of the fair state;
The glass of fashion and the mould of form,
Th' observed of all observers.

然れども。吾人が彼の心に入り、其の沈思せし所を沈思し、永遠の限界までも彼と介行し、恐る可き絶望の海に彼と共に游び、人間思想の最も純清なる邊に彼と共に翱翔し、明なる理の[illegible]、及び無窮、温和、美麗を考ふるの苦しき快[illegible]と共に感じ、又は貴とき精神が才智及び哲學の廣館に於て抱きたる、あらゆる光輝ある學想よりして、罪惡、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

朋淫、及び虐殺の庭に、俄然彼と共に落ち、彼の想像のあらゆる製作物の破碎せる片々を畫きて彼と共に震慄し、靜穏に、高尙に且樂き冥想より、直に恐怖及び災厄の眞心へ彼と共に送られ、此の死す可き世界の苦痛、及び罪過をば、墳墓の彼方なる世界及び吾人の思想中に常にかゝる恐べき影の勢力に觸れしめ、又は人心に於ける各個の激情が、或は勝ち或は敗るゝ内部の戰に出逢し時、即ち吾人の精神が一度、以上の如く働き又は刺激せらるゝの時あらば、此の崇高なる戯曲中の人物即ち此の動力たる神秘なる精神を畫く事も豈に至難ならんや。ハムレットの性質及び位置は人生に屬するあらゆる興味の中心點にして、實界に於て、吾人の最も愛する友等を吾人に近かしむる所以の壯大及び脆弱の形跡にして、ハムレットの性中に見出し得べからざるもの一もなし。疑もなく沙翁は總て他創作に優りて、ハムレットをば愛しつらん。此の公子が舞臺に現はるゝや、吾人は滿足し、其の去るや、再び出るを待つこと切なり。實に此の曲こそ、ほとんど全く只一人の性格に因りてのみ成り立つ惟一の戯曲なれ。誰か實界に於てハムレットを知る人ぞ。たとへ彼が性格は少しく虛靈的なりと雖も、誰か其の實在を感ぜざる人やある。あゝ此はげに怪むべきのかぎりならずや。吾人は彼が才智あり、且沈鬱にして孝心あるが故を以て彼を愛せず、反つて彼は實在し、其特質を表はすが故を以て彼を愛し、彼を考ふ。此れ我が感激の一般なり。余は他の人物にありては其悲劇たると、叙事詩たるとに論なく、物語りが概念の一部をなすを信ずれども、ハムレットの場合に於ては、彼れ自らに關する概念こそ、深く永久なる興味なれ。こは其の性格が多く完全に畫かれたるが故に非ずして、恐らくは何れの人の文章よりも、爰には一層強き人生の概念あるに由るなり。此所には吾人が探り得るよりも一層深き志想感情、及び動作の起源あり。此の起源は、知り難き深所より起り、其の深所には、吾人が明かに見るを得ざれども猶其の存在を信ずる物の惟一あり。此の如く、彼の働作の表面に浮べる調和し難き境遇は、吾人をして一般の畫圖の眞なるを、疑はしむるの勢力なし。此は皆盡く、最も賞嘆に堪へざる、最も卓見にして眞實なる確論なり。

（未完）

小説

橋松佳話

花圃女史

●出世のかけ橋

行かひ繁げき馬車のわだちの音のたえ間に聞ゆるはうら磯によせくる浪の聲、滔々とこゝぞ小田原の漁業場、五尺ゆたかの漁師ども、丸裸にかいあやつり、よせくる浪をのりあげのりこえ、舟唄いさましく聲を帆にあげて歸り來るを、かねて待まふけたる幾千の舟子、泳きつきてつなぐ綱に曳々と磯間へひきあぐる七八艘いつより多き漁に勇氣をましてふご半だい大笊を手に／＼提げ、かけより、砂にもり上る魚をわけて入れんとする混雜、こゝに又人なみうつて目かほをつかむいそがしさ、われがね聲あけてのゝしり飛すもあれば、一疋の魚のとりやりにせな擲らるゝ男あり、かなたのすみに半だいをおきて、五六疋の鰹かぞへつゝ十三計の小僧、人のさわがしきをさけて、逕より立歸らんと荷なひ上ぐる後より「奴まて、といきなり片頬ひら手になぐられ、よろ／＼とするを、ふみはだかり「だ、だれだはなせ「だれでもねい、おれだ、だまつてうめい事をするなアサア一疋おいてゆかねいなら、はなさね—「なぜだ、おいて行なら、おきもすべいが、全躰なんのわけだ「イゝニヤ、わけはない、とつさんの船はどうした事か少しも獵がねへ、おれにもいつものやうに錢をくれねいから、今夜ア東京の客衆が多くなつて、おもしれい町をからッぷところぢやアあるけねい、サア一疋片岡さんへでもやすくうつて、氷やへでも入て遊ばう同士にさそふからよこせヤ「よせイべらぼう、獵がねいッてそつちの運だ、おいらのしつたことかい、空うそふいてかたに天秤かくるを前へ廻つてさへぎり「この奴いふ事をきかねいナ「そんないふ事きくもんか無法な奴だ「なんだ、うぬがもんぢやあるめい、親方の荷の一ッや二ッ、ぬく事もしらねいのろま、うちころすぞ「ぶちころせ、ぶちころして見ろ、親のすねェかじるやつに、一本立の庄太が骨がくぢけるかイ「何をど、しほ木の丸太、あたりにありしをふりあぐれば、半だい打づして下にかまゆる天秤棒、十八九の脊高く總身に赤みを帶たるが砂地に太腰めり込ばかりに仁王立に立たるに、立むかふは小兵なれど、肉こえた骨ふくれ丸

顔に眼圓く口大きくてひきしまつたるがかまゆる躰に双方氣あひをはかゝ折しも、いつしかまた磯の混雜はしづまりて詩を吟ずる聲うるはしく若公達五六人ステッキ打ふりつゝ海水浴に人品にはふさはしからぬまで色くろみ、肌あらはに、磯風にふかした、このありさまを遠くはなれて見て居たり、こなたは萬夢中にしてヤット聲かけうちおろす丸太、天秤棒にさゝへしが、力あまつてうしろの方に、俄に空の響きうならしてけしとんだり、かなたのつけ入て又一うちとふりあぐる丸太に、しがみついてひく、ひかせじとあせるうち、庄太の力まさりてか、グット引に、前にのめつて俯伏しにたふるゝ脊のたゞ中、ズンと一と打、力にまかせてうちおろせば、アッといふ聲もろとも直にいたみをこらへてたち上りすき見て、かけ出すを、砂けぶりたてゝ「やい見ろにげるナと、聲かけて追かけ行、にぐる若者はこのさま見て居たる五六人の眞中つきぬけ、かけ行を、あとより追かけうちふる丸太に一人の公達の横腹したゝかかすつて行ば、血氣の公達すかさずあとより追つきて、肩をとらへ引もどし「無禮ナ奴あやまつて行け、庄太はかなたに心とられて、ふりもぎるやうにすりぬけんとするを、殘る二三人ドヤ〳〵とよつて立ふさがり「ヤイあやまれ、さつきから失敬ナ奴ダ、このありさまにいそぎては、にげもやらず、あざけるやうに見かへる若者にくしと庄太左の手に、前なる公達の胸先したゝかつきて、よろけるすきを見て、又もかけ出んとするを、他の一人がうしろさまに抱きすくむ、あへぐ臭に庄「邪、邪魔するナこゐつと共に右の手にふり上る丸太、一拂ひはらへば、ひよわの公達、たまりもあへず、キャッとのけぞるを見るより、もはや用捨ならじとてか一人はなれて、見たる少し年かさなるが靜によりきつて「どうしたんだ、貴樣は、君いたむか、濱へいつて汐水でもんで來たまへ、こら、どうしたんだ、とこづかれて、庄太ふりあふぐ顔に、いさゝか耻かしげを帶、庄「どうも、御免なさい、アゝどう〳〵にげちやいました「御免なさいちやない、さつきから、無法ナ事をするナ、大きいやつにむかつて、とものやはらかにいへば、いよ〳〵うづくまつて庄「ナニあつちが無法なんで 、おいらがさかなを、とらうとふんでス、とられめいとしたばかりですんサ若殿樣ア松田さまでせう、宿屋の臺所へ、魚をおろしにいつて、よく噂アきいて居ます、なんで

も大金持だつてネといひつゝ傍にある一人を見た「どうです、おいらのぶつくじいたきずは、ぜんていそつちがわるいや、むやみに止るから、おいらは木の枝かなんかに、ひつかゝつたとおもつて擲つたゝが「アハ、おれをしつて居るのか、おもしろい、オイさつきの奴は、にてげしまつたから、堪忍してやれ、君達も、さつきから、あの奴の方がわるいといつて、ゐたぢやないか、わるい奴をこらしめるこの小僧が正理だ、何すころんでけがをしたとおもつて、堪辨してやり給へ、庄太と同年輩のは、よせくる汐に一人の同じ頃の公達と、共に額のあたりをもみ居しがふりかへり「しかし、去かし、君、中なかいたいぜ「どらオヤゝゝ、大きなこぶが出來タ、僕もあの棒て頬べたアかすられタ、中に一番おさなく見ゆるがをどりあがりてうち笑ひ「愉快々々、さつきのざまア僕アおもしろかつた、ころ〳〵とところげるんだもの、よはいナ、アハ、大きな瘤だ君のこぶは、あの、月より大いぜ松「月、成程いつのまにか、月が出た、もつと濱をあるいて歸らう、どうだ仲直りにつき合ナ、けんくわもぶちあいも張合ぬけては、何となく拍子あしく、額のこぶと、頬をおさへて苦笑する公達、砂地にうづくまつて、身につゝれをまとひながらほゝゑむ庄太、同行をうながされても、恬として恥るけしきなく、最前の荷うちかづきおもしろさうに、立あがりつれ立行、松田は庄太と立並び「貴様は親があるのか、「ない、「どうした「どうしたかしらない「そんな奴はない、そしてどこに居るのだ「馬車小屋に居ます「馬車小屋に居るものが、なんで魚をかつぐのだ、商買ちがひぢやないか「だから、人がにくがつて、いけないのだ、晝は馬車の別當をして、夜は魚屋の親方に雇れて、魚のつく時分にこけへ來て、はこびやす、それを本當の獵師共がにくがつていつでもこづきまはされるんで毎晩々々喧嘩をするんす「おかしナ奴だなぜそんなにかせぐのだ兄弟でもあるか「兄弟もありましねい」一體なんだ、身分は、どこのうまれだ瘤をおさへゐる一人「松田君よし給へ、きいてなにゝするのだ「君々松田君は戸籍しらべのやうだ、と又おさなきが笑ひかたむけて袖を引うごかすに、松田の公達は一切かまはず「どこで生れたのだ、生れた所はマア八丈島だらうといふはなしだ「八丈島、大變なところだナ、おとつさんの名はしらないカ「おとつさんか、名もなんにもしらない、おつかアのこと

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

はすこし覺えてゐるが、なんでもしんだらしい、おいらはたつた一人で、あつちの人や、こつちの人に、世話になつてゐるうちに今、おまへ様がとまつてゐなさる、うちのやつが八丈の者で、こつちへ來る時、おいらもかはつた土地が見ていとおもつて、舟の中へもぐりこんで、同士にのつて來たが、あいつがこゝにしる人があつて、こゝへおちついたから、おいらもマア、こゝにゐやすが、どれもこれも他人の中だ、一人はたらいて一人くふだ「ウムおもしろい奴だまだ東京はしるまいナ」「しらない、この土地の外、どつこもしらない、東京へも行たいが、學問が出來なくちやだめだから、そこの會堂の教師さんに頼んでをそわつてゐる「學問する、ゑらいもんだ、あしたァ宿へこないか、又おもしろい咄しをきくから「おいらもおめいさんと、はなしするのがおもしろいやうな氣がするから、きつと行ます「アヽ待てゐる、こゝの横町でわかれやう、き様のうちはそつちか「うち、うちなんざァない世界がうちだ「大きなことをいふナ、きつと來るのだぜ庄太はうなづき早足になり行を殘をしげに見送る松田の袖をとらへて、かのをさなきは「あの男が氣に入つたの「そんなんじやない、感服した、實に偉人物だ、あれが學問したら君達はかなはないゾ

おろかしき性の者なりとも、人の能ありと見出さるれば、みづからたのむこゝろ出來て、勵むは人のならひなるに、これは天性、自尊自重の精神かたく、ものに屈せぬ庄太、いさゝかの事より松田家の息、堯行に見出されて、翌日宿やへたづね行ば、かねて咄しにきゝしりし松田侯爵、人を憐み才を愛すの心、いとふかきにかつは好奇心にもかられ、その物語、かたへにきゝしより、不撓不屈の精神たのもしとて東京へつれ歸り、某校に入學させて親身のごとく親しめば、庄太氷のごとくいてかたまりし性質も、愛の泉にとけそめ、たれにも屈せぬ身を松田侯にうち任して、此大木の蔭におほはれ、はじめて寒暑身につらからず、春秋の雨露は若葉にのみかゝるものとさとり、人らしき境界に身をおけば、心さまもゆたかに、高尚に成行て、こゝに一年の春秋をおくりむかへぬ。繁華といへど、朝夕に馬車の客をむかへ送る小田原とは事かはつて、見るもの聞ものめづらしく、人は皆、かしこきものに見え、われのいたくけおさるゝやう覺えて、心の中おもしろ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

からぬにも、いよ／＼まけぬ氣性はきたへられて、東京の事情、しるゝまゝにいつまでも人の家に寄食せん事、心よからず、さりとて松田侯のわれを見ぬきて、待遇あつきは心にしりながら、まだかたまらぬ筋骨にも、幼きより人によらぬ精神はきざみつけて、今はたいよ／＼堅固に、いかで、自立して勉學もし、かつは自分に學資をも辨せんと、さてこそ遂は下にありし身を、拾ひ出せし松田侯の面起し、即恩報じと決心して、翌年の夏のはじめに、壺行に心中打明て、松田侯にいひつぎもらふに、侯も打笑て、それもよからん、心のまゝにさせよといひしをきゝ、庄太急に勢つき、その日の夕方、とにもかくにも身の落付方さだまらざる内は、この門の閾をふみ申まじ、御健勝でと丁寧に禮をのべ、僅一本立の庄太、青き天井にあらかねのつちたゝみ、我家ひろしと打ゑみ、松田侯の恩恵の夏冬のもの一荷水引かゝりけ、銀包一ッそのまゝ紙入かはりに懐へねぢこみ、うしろに笑ふ下女共の聲よゝ流して出行先やいづこ

その頃より、老鶯また聲さびて殘る根岸の里、ひろくかまへたる牧場より、涼しき朝風につゝそでのかろく、書生乳やと里の子に、うたはれて、荷籠かつぐ男ありけり、曉の星をいたゞきてめうしの乳をしぼり、やがて五勺一合と區別して、ブリッキの德利へはかり入るゝ間のいそがしさ、朝日さしにはへばうらの廣庭に數多き牛ども、はなちて後荷かごかたげて廻る得意先の門々、起ぬ戸口を一心にかけあるきて、立歸れば少しのいとまもあだにすぐさず、あらわざになれし躰のつかれをかまはず、本を小脇にかゝえた、從前の書生風、わらんじ、下駄にはきかへ、いづく／＼か出で行、夕はゆふべの配達、時刻晩れじと、下駄の音カラ／＼といはせ歸りきたり、又しきせにかへて、荷かごを肩にす、歸れば、直に牧牛を小屋にいれて、あたりを掃清むるなど、自身のなすべき事、一日もかゝさず、仲間の配夫に目もかけず一人部屋にこもつて、かた隅に机一脚をかまふ、主人たゞものならじとさとつて、半年ど一年をふるまゝに、様子をきけども出生はいはず、たゞ今すこし時間あらば、なほ勉學したしとの事、かゝる大牧場、手ひろくかまふるほどの主人なれば、よき心がけとよろこびて、ひるまは悉皆學問に從事させ、夜は帳合にこの牧場の金の出入をゆだね、かひば寐わらの古き

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は庄太の所得となしやりぬ、庄太まけじ魂はあれど、無邪氣に、愛嬌ある性質、たれにもにくまれず、又この主人に見こまれて、助けくるれば、ます／＼勵みわづかの給金貯蓄銀行にあづけ、利を生せて、もよりの學校に業を修め遂には大學の撰科生になりおふせやぶれたる布子きて、毛衣外套のうらにあたゝけき若殿原、かつて小田原に、おさなしこみしなども、同じ室に膝まじゆれど、七八年の昔語、さすが互に顔見わすれぬにもはぢず、二年をこゝに過し、夏の休暇其儘退學して今村久とて胸中うち明てかたり合し友の歸省せしを、伊豆にとひ、將來の爲はからんの計畫、うち明て主人に相談すれば、日頃見ぬきし君の事それほどの事なくてやは、かゝる牧場をひかへた、躰は自由ならねど、金の御助ならば、出來る丈の事したき願、又手につく人ほしとならば、この牧場のもの、たれなりと撰て、わが手足ともつかひ玉へといふ橋本此主人の大腹中かくとはかねてはかりしれど、彌この口振に安んじて、その翌日とく心當としたる伊豆をめざして出立せんとす、主人もよろこび何はなくとも、さはさきゝはふ別れのむしろ、橋本を床の間の上座に請じて、おもだつたる見せの者共、よびつどへその夜はかたりふかして、朝早く其昔、小田原にて松田侯よりもらひし古革鞄一ッと、本箱三ッの財産をこゝにとゞめて手さげ一ッ身輕の出立、旅費にもと前夜主人より心つけし、厚意の餞も、事の手はじめ人のかげにはよりたくなしとおしかへし、懷もかるく氣もかるき一人旅、この朝家の内不殘早く起て朝飯も心づかひして水かげんも橋本このめるやうしたて、たうべさする女中のはなむけ、男共はせめて道までとつれ立おくるを平に謝してけふ迄の禮を一同にのべて遥けき前途ながめながらいそぎもせず、ゆう／＼とあゆむ一貧生の風躰、行すりの犬うさんくさげの顔に鼻うごめかして通り過る路ばたの郵便箱に立よつて、いつの間に書しやら、一封の書狀、懷より取いだし、ふたかゝげて入るゝを見れば、幾年月、へだゝりても野中の清水もとのこゝろは、忘じの男子の魂ときはかきはの松田侯への當名なり

（未完）

默而識レ之、學而不レ厭、誨レ人不レ倦。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

兒藍

邪推深き後家

若松しづ子

高輪邊の見晴らし好き邸宅に住はれる田沼夫人といふは、御腹の好い五十前後の後家で、洋行歸りの世とりが別居を主張するに餘儀なく、數多の子女を育てた、さしも見事な自邸に、今は一人住ひの身でした。

下女下男の外に、身のまはりの小用を足させる爲にとて抱へた十五才の小間遣ひが居り升たが、其他には夫人の淋しさを慰める放し飼の小鳥が有つた計りでした。此鳥はジヤックドーといつて、よく鳥に馴た鳥で、先年洋行歸りの折に、息子が母へ出產に贈つたものでした。此まめ〳〵敷鳥が家中勝手に遊びまわるとを免されて、坐敷の中を飛びあるき、欄間の後ろ、簞笥の向ふと覗きまわり、或ひは思案顏に首を傾け、或ひは咽喉を鳴らし、咳をするなどはいつも夫人を笑はせ升たさうして、折々は食物を廣間の飾りつけの後ろへかくし、外からくわへて來た草や、木の枝で、奇麗に淸めた坐敷を汚すとは有つても、さほど、夫人の怒りにも觸れず、此鳥こそ誠に世に仕合せものといつてよいとでした。

小間遣ひのおつるといふも、矢張り夫人の氣に入りで、これがまた實に無邪氣な可愛い〻兒でした。前主人は却つて年の行つた女より世話がやけぬとて、平常重寶がつて、隨分目を懸けて遣はれ〻ば、おつるも何事にも奧樣大事と、念を入れて仕へ升た。併しおつるも子供のとて、用の暇に一寸、夜なべにかゝつた毬をお庭の隅でついてる處を呼立られ、顏を赤くし、息を切つて、茶の間へはいる時分、奧樣は逸早く、

オヤ、つるはまた毬かへ？

と先へ廻つてチクリ一針やられ、一人眞赤になつて、

アノ、只今お掃除をしまひ升て、つひ、ちよいと。

と申譯しながら、奧からは見へない筈、隔れの北窓も確かにしまつて居たに、どふして見た樣な今のお言葉と不審に堪へませんかつた。おつるは正直無垢の者が心から推し量つて、奧樣の鋭い眼光は閉ちた窓からも通ふ折があるといふとは知

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

りませんかつた。これも元はといへば、夫人の若い折からの寡婦ぐらしが、いつのほどにか夫人に教へた邪推がある爲で、人心の頼みすくない處から、自然万事に疑を容れる様になつたのでした。

併しおつるは御主人の眼の鋭いことに聊か迷惑しませんかつた。いよ〱氣に入られ、其氣輕で、賑やかな處を珍重され、いつも奥様のお側に樂しく立働いて居り升た。ジヤックも吾より、新參のおつるが誰より好で、奥様の指圖で茶の間で解物する時などは針箱の上へ坐を占て、頻りに其擧動に眼を注いで居り升た。或日おつるは奥様のお召しによつて、お側へ行くと、丁度お手文庫の鍵を開けて在らつしやる處で、おつるのこれまで見たことのない美事な物が澤山はいつて居り升た。奥様は金銀、鼈甲の髪飾品が一杯はいつた箱をお開らきになつて、錆のついた簪をおつるにいひつけて、磨けと仰い升た。おつるは平打の銀簪と櫛の大きいのに驚ろき、さし込みの花簪を見ては、わたしもお嫁になる時は、奥様の様にかふいふのをさすのかしらと思ひ、其他珊瑚の根がけ、琥珀の珠蒔繪の大櫛など一々美よだとおもひ升た。これらの外に、

瑪瑙の珠數がはいつて居り升たが、おつるは其美事な色にはホト〱感じ入つた様子で、我を忘れて兩手にもてあそび升た。坐敷に今まで遊んで居つたジヤックも、此時おつるの側へ參り升て、矢張り、赤くチラ〱した珠に眼の止つたものと見へて、嘴に珠數の端をくわへて、頻りにおつるの手からもぎとらうとし升た。おつるは笑ひながら、

ジヤックや、おまへはいくら慾くつても、奥様の一番お大切なのだから、お貸なさる氣遣ひはないよ、

と申升た。夫人はホヽ、笑みながら、おつるに此品物の中で、どれが一番立派だと思ふと問ひ升た。おつるは、

此赤いのが一番にお立派な様です。

と答へ升た。丁度此時、來客を知らせに下婢が來り升たから、奥様は羽織を着かへ、撫つけを奇麗に繕つて、さて簪の掃除もあらまし出來たので、大急ぎに手文庫を片つけ、いつもの通り鍵を下さうとすると、おつるが今まで持つて居た珠數をツイ取殘したことに氣づき升たが、餘り客を待せるのもと、其儘鍵をかけてしまひ、珠數丈は一閑張りの臺の上に殘したまゝ出て行升た。客といふのはどこやらの奥様で、娘二人を

つれてゆる〳〵話され、夕飯の馳走も出升たが、夜九時頃になつて、おつるは年のいかぬ者と、いつもの通り夫人の心づけで、先へお暇を遣はされ、吾が部屋へ退り升た。さて此夜は夏の月の隈なくさし込むとて、おつるも直ぐには寐られず、秘蔵の簪箱出して、貰らひための簪、半かけなど打かへし〳〵て、楽しみ升た。いつの間にかこゝへ飛込んだのは、例のチヤックで、ノソ〳〵とおつるの側へより、束髪用のピンを箱からくわへ出しては畳の上へ落しポツ〳〵音のするのを不審さうに首を傾けて聞升た。おつるは其様子が可笑いとて、チヤックを合手に暫時らく打興じ、さて餘り遅くなつて、奥様に叱られてはと、急にチヤックを椽へ追ひ出し、床について間もなくスヤ〳〵寐入り升た。チヤックは追ひ出されて興をさまし、さてまだねむくはなし、何がな面白きとと思案し升たが、猶て當もなく、最前おつると奥様のさま〳〵の品ひろげられた茶の間へはいり升と、先ほどのコザ〳〵は最早一切片づいて、たゞ例の瑪瑙の珠數巳が留守居部屋に、さし入る月に光つて居りました。チヤックは先づ台に上つてコッ〳〵とつ突升たが。奇麗な計りで食べられもせず、つまらぬと思ひながら、いたづら半分くわへて外へ飛び出し升た。併し此珠は中々重味が有つて長くは持こたへられない、兼て拾ひものをさま〳〵隠くして置いた屋根までも覺束ないと思つてか、お庭の呼井戸の椽へ足をとめてくわへたまんま、中を覗くと映るは吾姿と四ツ五ツの星で、此時チヤックも少しく我のつかれを覺へ始めていつそ、食べられもせぬ此珠を此井戸の中へ落して見ようかと考へつくや否、ヂヤボンと音して、珠數は水底深く影を隠くしてしまひ升た。チヤックはこれまで幾度か此井戸の中へ物を落したとか有升た。其中で羽の様なもの、鶏の羽や、枝切などは浮き升たが、お三の真鍮の指貫や茶碗のかけなどは沈んでしまひ升た。どふも時と場合で、チヤックには分らない、しかし水面のボンヤリしたはどうやら面白い様だとチヤックは得意顔に暫らく咽喉を可笑気に鳴らし、猶てあと片づけするお三を勝手に訪ふて夕飯を貰らひ升た。さてチヤックいたづらは斯の通りでしたが、其所業がどれほど人を迷惑させるか、また此次にお話し致しませう。

（未完）

雜録

芝家隨筆

ふみ子

○童蒙婦女子

舊き小說のはしがき、今の新聞の廣告なんどにも、平易にして解し易き書といふとを述ぶるには、必童蒙婦女子にも云々とありて、幼き子供達と同樣に、婦人を見做したるこそ心ゆかね。昔は兎もあれ、今より後の婦人達は、學の道に志す人も少かるまじきを、いかに昔より用ひ來りたる文句なればとて、今も會釋なし之れを善き事のやうに、書列ぬるは情なからずや。殊に童蒙婦女子にも云々と記せるからは、強ちに男子達の閲覽をのみ求むとの意には非るべし。婦人女子をも花主の内に加へむとの望みなるに、先づ之れに對して輕蔑の語氣を含みて購ひ見よといふが如きは、商業上の禮法よりいふも如何のものにや、其外女々しき男らしからぬなど、凡そ善からぬ事の形容詞には、女性に屬する文字の、心なく世に用へられ居るは更にもいはず、婦人其人の口よりも、かゝる詞の無造作に漏れ出るを珍らしからぬは歎かはしきことなんめり、われはかゝる文字も詞も、近々世より取除かれて行はれず成り行かむをこそ願ふなり。

○田舍住居

世を捨てゝ山に入る人山にてもなほうきときは何地ゆくらむと昔の人のいひけむごとく心に、うき世の塵に染まざらむには、市に在りても大隱たるとを得べきなり。されど其は大悟したる後の事、まだうき世の波にゆられ〳〵て、醉ひ心地する初心の人は、しばし田舍すまゐなし見むも、のぼせ引き下げの一良藥ならめ。われは稚きより市町にのみ人となりて、田舍のけしきは、春の花秋の紅葉を尋ぬるをり〳〵、うち見やりたるのみなりしが、近頃故ありて田舍へ移り住みけるに、都とは事變り、眼に映るもの、耳に入る聲、一つとして天眞爛熳ならぬものはなきにぞ、われも生れ變りたるが如き心地して、天晴れ一個の、氣樂なる田舍人とはなりすましぬ。人は無心と笑はゞ笑へ、さても田舍の氣樂さは、苦しき胸に金

時計爛して、紳士を氣取る人もなければ、いかめしき煉瓦の家に住みて、借金の淵に溺る、咎もなし。朝に鍬を手にして、妻と共に、後の圃に出でゝ耕す夫は、夕に夫人を伴ひて花の宴に赴く紳士よりも、夫婦の語らひ樂しげなり。虫喰みたる椽側に片足さし延べて糸紡む婆樣は、御隱居樣と敬まはれて、奧の小坐敷に住み玉ふ姑御よりも、其おもゝち何となく平和氣なるなど、人の心も姿も、兎角に田舍人の自然に近きを見るも樂し、殊に田舍は隣家遠ければ、うるさき噂も牆越しに聞かさるゝともなければ、家の姆も朝顏に釣瓶とらるゝ恐こそあれ。井戸端會議の一員に備はる心配はなし。されば我家庭だに清く温かならむには、幼き子供の教育にも、田舍は屈竟の場所なりけり。かゝると數々あるが上に、都には珍らしき鳥の聲をも、日毎のやうに聞き、南の方に枝さし出たる梅も、隣の軒に遮らるゝ患もなければ思のまゝに咲き匂ふなど、實にも田舍の一徳なり。たゞ春の日永のつれ〴〵、秋の夕の淋しき折なんど、都の友を思ひ出でゝ、語らまほしとの心切なるも道のほど遠く隔たりたれば、訪ふにも訪はれむにも、心に任せぬなんどや、新らしき田舍人の憾にやあらむ。

○烈女と淑女

烈女として、事ある時に身を致さむよりは、淑女として、平々坦々の境涯に徳を修むるもの却て難きを感ず。大なる操は守り易きものなるも、小さき行には缺點生じ易きものなり。人は非常の時に際しては、非常の決心をなすものなれど、平常事なきの時に於て、非常の時に於るが如き勇氣を以て、己れに勝つとは極めて難し、されば人の最注意すべき時は、艱難の時に非ずして、安逸の時にあり。失意の時に非ずして、稍得意に誇したるの時にありとす。

亡妻のひつぎに収むるわがこゝろ

泪花

うつりかはりの　世のさまを
おんみのおちに　文せしが
緑となりて　はや拾年
三人の兒等は　まどゐして
父よ母よと　呼ふなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

契るとしつき　矢のごとく
愛のまじわり　つきざるに
病のあらし　ふきすさむ
家庭の光り　ほのぐらく
いつきえなんも　はかられじ。
はなのかんばせ　雪のはだ
こぼるゝあいの　くちよりは
からくれないの　あふるなり
目もあてられぬ　此血しほ
無惨と云ふも　愚かなり。
神の與ふる　あいのむち
十字の光り　あふぎみて
暗きたびぢを　たどりゆく
病にたゆる　うきすがた
思ひやるだに　憐れなり。
醫師に聞くも　いたましゝ
心つくしの　みとりこそ
わがつとめなり　せめてもの
思ひわづらひ　日を送る
心いらゑど　すべもなし。
一年すぎて　春はまた
野山をかざり　またるれど
霜にやつれし　うきなやみ
日毎に弱る　いきづかい
此世のわかれ　いどちかし。
あゝわが妻は　旅立てり
わが半身は　つめたくも
空しく床に　横はる
兼ての覺悟　今更に
きゑてぞ涙　せきあえず。
母の乳房に　あきたりて
愛の口つけ　たゑざりし
汝がほゝこそは　痩にけり
みる目もつらき　いぢらしさ
母なき今日は　孤兒ぞ。
やよ孤兒よ　ふしあはせ

母のおんあい　身に知らぬ
成長つのちぞ　思ひやる
孤兒とぞ　定まれば
生れざるこそ　幸多き。
春を迎ふる　時くるも
錦をかざる　折あるも
母なき家は　しぼむなり
母を求むる　なき里は
胸をつらぬく　創なり。
ゆめおろそかに　なさばこそ
ますらをの手に　ゆだねたる
仇とたゝかふ　此つるぎ
研ぎすましてぞ　光りある
妻の紀念や　み榮ぞ
妻のかたみを　はぐゝみて
此世のつとめ　終らん日
あなうるわしや　希望あり
樂しき國に　母がすむ
父もいたらん　兒等もこよ。

寄書

基督教主義學校の將來

杞憂生

我邦今日の基督教社會には、幾多の教育家あり又篤志家あり。從て基督教主義を以て成立する學校の將來に就ては、私かに計畫するものあるべく、余輩不肖敢て容を入るゝの餘地なかるべしと信ず。然れども是等の學校の將來は、如何にして盛大ならしむべきか、將來の方針は如何になすべきか、是れ該社會の忽にすべからざる問題なるべし。余之を思ふ事幾回、只其思案なきを以て、屢々筆を執りて屢々筆を投ぜり。近時耳目觸激多く、遂に一言の止むべからざるに至れり。余豈に徒らに默を好まんや。

近時府下の少しく有名なる學校は、今日の學制に顧みる所ありて、多くは尋常中學の認可を受け、又受けんとしつゝあり。尋常中學は高等中學に入り、更らに大學に入らんとする階級にして、大學に入らんとする子弟は、滔々として尋常中學に入るの止むに至れり。されば尋常中學の認可を受けたるものは、益々盛大に赴き他は漸々衰弱するの傾あるは理の見易きものなり。基督教主義の學校は、此時に際して、如何の方針を取つて成立せんと欲するか。

(1)　普通教育を專らとするか。

之を聞く、ユニテリアン派の一宣教師は、我國の普通教育の大に整頓するものあるを見、將更らに外國人の來りて、普通教育に盡力するの要なきを主唱し、獨逸派は近時の如く一種の高等教育を施し、傳道の如きも之を見合はすに至れりと。此一宣教師の眼孔少しく高きものあるを認めざるを得ず。然れども他の宣教師及び諸教會に於て、一學校を設立し、新に普通教育を專らにせんと欲せば、須らく尋

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

常中學の認可を受けざるべからず。已に彼等の如き宏大の建物あり、精緻の機械具はり、之を中學の制度に改めんと、蓋し一朝一夕の業なるべし。一個人一社會にも生存競爭ある如く、學校も優勝劣敗の理に漏るゝものにあらず、之を顧みることなくんば、今後の形勢甚だ恐るべきものあるを信ず。若し夫れ一旦尋常中學の認可を得ば、素より其筋の規定せる訓令制度に則り、決して宗教を混合し、聖書を講述するを以て專らとなすべからず。

(2) 高等教育を專らとするか、

西京の同志社大學の組織は、今日基督教主義諸學校の將に望む所なるか。我れ思ふに同志社大學の如くせんには、幾多の資力を要すれば一朝容易に爲し得べからざるは明かなり。又高等中學の程度に適する學科を教ゆるとせんか、人各目的あり、必ずしも官吏たらんことを期するものにあらざれとも同しく費用を要し、同じ年限を費すとせば、何人も尋常中學より高等中學に入り直に大學に入るの得策を取るべし。故に基督教主義學校にて、高等教育を專らとせんには、更らに幾多の思考すべきものあるなり。

(3) 傳道教育を專らとするか、

彼の普通科を置き、更らに高等科を設けて、子弟を養成するは、基督教の傳道者を造らんとの意なるか、余は決して然るものと信ずる能はず。彼の聖書を講じ、基督教を說くは、全く今日の德育上の必要ありて、然るものなるべしと信ずるなり。然れとも、如何にせん、今日基督教主義に對する世上の惡感を。余は其惡感寧ろ邪推を恐れて顧みんことを勸むるにあらず。又恐れ顧みるの必要もなからん。然れとも好んで危きに近よるは君子の業にあらざるべし。寧ろ此惡感若しくは邪推を利用して、社會に順應することを力めざれば、却て不利を來すことを記さゞるべからず。要するに傳道教育は僅かに一部を占むべきのみ。

女學校の如きも、普通教育と高等教育と、二つに區分し、普通科に於ては宗教を加味することなく、彼の高等女子師範學校高等女學校及び師範學校女子部等と連絡することを力めざるべからず。

因に云ふ教育の目的たる人を造るにあれば、卒業生將來の生計の如き決して學校たるもの丶、敢て干涉し得る限りにあらずと雖も、如何にせん。今日の官立學校の卒業生には、特權ありて、唯卒業すれば必ず生計の途を得ること容易なり。然るに基督教主義學校は、同志社の如きを外にしては、能く卒業したるものも有用の地位を占むるもの少なく、辛ふして大學選科に入るもの丶如き最上ならんか。其他幸ひにして、教員の好遇を得たるものは、地方の女學校教員となりて、彼に移り此に移るが如きものあり。而して今日に於ては、斯の如きものすら甚だ稀にして、偶々彼等の學校を卒業するも妙に氣位のみ高く、改めて尋常中學に入るを好まず、さりとて高等中學に入るの力なく、空しく已れの不運を慨き、少しく文筆に巧みなるものは、新聞に投身し、雜誌に一文を寄せ、徒らに心驕りて爲すことなきもの今日滔々として多し。之れ世上に信用薄き所以にあらずや。されば基督教主義學校に於ては、先つ止むを得ざるの方便として、卒業生の始末に就き多少注意する所あるを要するなり。

彼の基督教主義學校の女學校を卒業するもの多くは、一家の良妻賢母たるを以て目的とするものなるか如し。然れとも教員特に小學教員たらんと欲するもの丶爲めには、少しく方向を改むべき必要ありと信ず。故に或校に於ては先年師範科を設立せるものあるを聞けるが、今日の制度上、特に宗教に關する世上の邪推を利用せんと欲せば、勢ひ、高等女學校、女子高等師範學校等と連絡し、普通科若しくは高等科卒業後は、無試驗にて入るゝ如き、特約を得、之に從て規定するものあれば、生徒等の種々望む所に行かしむるの道を得たるものと云ふべきなり。

右に略叙したるは專ら今日後の方針にして、成るべく世上に順應する所以を述べたるに過ぎず。されどこれ普通科一部のことにして、此一部は全く、今日の制度、訓令に從ひ、決して宗教的臭味を入るゝ勿れと云ふにあり。更らに一言すべきは、高等科若しくは專修科或は神學科の事なり。

(1) 高等科は如何にすべき。

帝國大學の門に入れば、官吏となり、特權者となるに於て、便利少なからずと雖も、天下の子弟唯一大學の門に入らんと難きのみならず、又望ましきことにあらず。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

此に於てか、慶應義塾大學部あり、同志社大學部あるに至れり、今後愈々進歩せば、幾多の私立大學を生ずるに至らん、されど之れ將來のとにして、現今に於て望むべからず。故に資力の許す限りは、尋常中學なる普通科の外高等教育を盛んにし此部に於て、其奉ずる所の主義を主唱するも敢て妨げなからん。夫れ外國より資本の補助を仰ぐ如きは實に慨はしきとなりと雖も、今日止むを得ざるの學校に於ては、特に斯くなしたらんには、宣教師等の感情を害するとなく、此高等科に於て正々堂々基督教主義を主唱するとを、爲すを得べし。斯くの如くせば、今日の學制の少年子弟に宗教的臭味を與ゆるを不可とする主旨に適すべく、又巳に高等科に入るの程度に至れば、多少自ら信ずる所も定まり、將來世に立たんとするの思想も定まるの時なれば、斯に始めて宗教の臭味を入るゝも不可なきなり。

特に高等科に於ては、一種の特色を有するものあるを要す。之れ今日と雖も認め得ると難きにあらず。男學校女學校共に、基督教主義を以て成立する學校の生徒は德育上優れる所あるは、事實掩ふべからず。此特點は、特に高等教育を施すの時に於て、爲し得るを要す。又我國に於ては、社會改良史上、基督教徒を除外におくを得ず。例へば孤兒の頼るなきものを養成せんが爲めに、家産を拋ち、孜々として力むる所の孤兒院の如き、十中八九は、基督教徒の手に成り。禁酒會の如き、若しくは婦人の德行を奬勵する集會の如き、社會風俗の改良、矯正に力むるもの今日基督教徒に優るものなきは、事實にして決して掩ふべからず。若し之を曲げんと欲するものあらば、余は其曲學阿世の流たるを知る。寧ろ嫉惡すべき陋劣の念に滿さるゝ無智漢なるを知る。巳に斯の社會改良的の事業、精神は最も我國基督教徒の特色なり、此長所を發達せしめ、社會に順應して、專ら力を致さんものを養成するは、此高等科に於て爲すべし。

又爲し得べくんば、基督教主義をもて實業社會に力を伸ばさしむるとを努めざるを得ず。之れ今日官立諸學校の出身者の力めざる所のものにして、我國に於ては切に要する所のものなり。

(2) 神學科は如何にすべき。

基督教的主義を以て成立する學校と雖も、神學科なるものなく、從て傳道者養成を期せざるもの少なからずと雖も、若し傳道者を養成するの必要を認めば、こは現今の儘にして之を置くべし。其養成の方法の如き必ずしも言ふを要せざるべし。只一言せん、數年前の事なりけん、地方に赴く傳道者は特に神學生上りの人物は哲學なんどの奥妙なるものを説き、地方傳道に適せざるものあるを目撃し、本多庸一氏に談ずらく、今日農業を以て成立つ地方に赴くには、多少農業の心得あるものならんには、大に傳道上に利する所あるべし、那は惡感を以て満されたる基督教の如きは、多少經濟的の關係伴ふことを希ふものあれば、新科學的の思想もて、農學に通ずるもの、如きは、大に信用を得、從て傳道上、多少の方便となるとあるべし。ボーエン近世哲學の飜譯書や、中江氏譯の理學沿革史を見て、説教中に妙理を入れらるゝは、傍腹いたき心地せらる、少壯者より寧ろ老成的人物を要すと。本多氏いへらく、然らば津田仙氏の如き蓋し好恰の人物ならんとて、主客別れたるとあり。先頃文部大臣井上毅氏、演説すらく第二に力むべきは實業教育に在り國民をして生活の路を得せしめ前途富國の方法を講ずるは近代各國が注目しつゝある教育の一大要義たり故に教員たるものは必ず其就職する地方の實業に對し相當の知識を有し及び十分の注意を怠るべからず例へば長野、群馬地方の教員は養蠶に心を用ひ沖繩、大島地方の教員は製糖の術に通ずると香川、愛媛地方の教員は製鹽を知ることを要するが如し。之を要するに今後教育上の方針とする處は虚を去り實に就き愈々實用の二字を忘却すべからず殊に普通教育に於ては高尚の理論を避け專ら近易着實を旨とせざるべからず云々亦之れ傳道者たるものゝ戒めとするに足る者な一の方便とするに足るべし。傳道者は猥に高尚の學問を要せず、寧ろ元氣あるを要す。元氣ありて、通俗の人々に順應し彼等の感情を利用するの技倆なかるべからず。

以上は篇に記する所を略叙したるに過ぎず。之を總括すれば基督教主義男學校は今日の普通科を尋常中學の程度とし、其筋の認可を受け、毫末だも宗教的の分子を加味せざる樣にすべし。女學校も亦女子高等師範學校高等女學校、師範學校女子部等と連絡するものあるを要す。又男學校に於ては高等科を置きて、高等教育を施し特志者を養成して、專ら基督教主義を希するものゝ、特色とする社會改良家若しくは實業家を出すとすべし。又神學科をおくの必要缺くべからずとすれば教授法に於て大に改革なかるべからず、其改革要旨は、社會に順應しつゝ、人々の感情を利用する技倆を養ふと、其地方/\に應ずるの心得あるとなり。鄉に入りては鄉に從はざるべからず。徒に空想を抱きて、精神的拆と誇負するは寧ろ憐れむべきものなり。

我國教育の制度は、着々歩を進め、益々整頓して、敢て此間に突飛を許さず。此時に當りて、封建時代の一大塾舍として、一人物之を指揮管轄し、吉田松陰の松下義塾に於けるが如くにして、將來に成立せんとするか、換言すれば同志社大學を摸擬とするか。或は、一部は今日の制度に順應して、全く普通教育を施し、一部の高等科に於て特色を發揮せんと欲するか。余は基督教主義教育者が、早急に之を斷して、世上に告白せんとを希ふものなり。見よ現今基督教主義の諸學校は、事實上益々衰頽に傾くにあらずや、此時に當りて大に改革する所なかるべからず敢て一言を呈して諸氏の猛省を促がす。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

片々

○國民の躰格、配偶の撰擇

時事翁屢奇警の言を吐く、去る七日の新報上に說いて云はく、草木の種子、魚鳥の卵、種馬種牛等を撰ぶには必ず其素性を糾し、卵なれば重大なるものを撰び、牛馬なれば其躰格氣質の優りたるものを撰び以て之を配偶孵化して始めて彼の逸物と稱するものを得べしと。更らに我國人の智力は歐米人にもおさ〳〵劣るものなきも、身躰柔弱にして甚だ不經濟なるものあるを說き、遂に左の如く男女配偶の撰擇を說けり。

結婚に配偶を擇ぶの一事に至りては率ね唯配偶者の醜美智愚を問ふのみに止まりて却て其素性血統の詮索を等閑に付するが如きは遺憾に堪へざる次第なり我輩の爰に謂ふ血統素性とは其祖先の氏素性貧富貴賤に重きを置くにあらず況んや俗に所謂家柄をや氏も素性もなき卑賤の者にても父母祖父母の身體健全にして曾て其家に遺傳の病癖あらざれば則ち足れり加藤清正の子孫にても累代の間に悪疾に罹り病癖を血統に遺すことあらば虎を擲する豪勇の後裔も賣女の子孫と甲乙の差あることなし名家の系圖は恃むに足らざるなり又醜を厭ふて美を愛するは人情の自然にして配偶に容貌の醜美なる者を擇ぶは至極尤のことなれども今の世間に好男子美女子と稱する者は多くは肺患者が、婦人なれば肺患に血の道を兼れ、才子多病と稱して善く飲めども多く食ふこと能はず、海棠春雨に惱むが如しとは時候の爲めに咳嗽に苦しみ歩行せんとして腰部の攣急に堪へざる者なり畢竟するに半死半生の病人にして斯る好男子美女子に生れたる其子孫は亦必ず半死半生の骨瓢箪たるを免れず人誰か子孫の繁榮を願はざらん之を願はゞ先づ其配偶の血統素性を詮索せざる可らず天然遺傳の理は決して欺く可からず瓜の蔓に茄子を生ぜず倔強の子は倔強なる父母に生まる獨り茄子の種子を擇ぶを知りて人類の種子を擇ぶを知らざるは迂濶の甚だしきものと云ふ可しと

蓋し時弊に適中するの言といふべし。

○聖公會の結婚及離婚に關する告示

聖公會監督エドワルド、ビカステス氏及び監督ジヨン、マキム氏が結婚及び離婚に關して、教職の心得に與へられし告示文と云ふもの、日曜叢誌第五十三號に出づ。左に摘要せん。

茲に基督教會の結婚律が基く所の大則、及び教會の教師として我等一同が守らざるべからざる若干の規則を略記せん、

先我等が翼々として考察し、拳々として服膺すべき三大則を左に開陳す、

(一)基督教徒の結婚は不解又不毀なるべき事、即ち基督教徒には離婚及び夫多妻は蓄妾を許さゞる者とす、此原則は最初の結婚制度中（創世記二章二十四節）に已に含蓄せられたる者なるが「人心の不情に因て姑く緩められたりと雖も、我等の主は其弟子に之を再び嚴命し給へり（馬太福音書十九章三より九節）、〔離婚禁示制の例外は下に之を掲ぐ〕

(二)三等親内の婚嫁は不合法なる事、此原則は利未法典（利未記十八章一節）の中に明文を有する而已ならず、古代に於ける他教國民の風俗中にすらも通例認められてありき、歐西の律法中に之が一例外、亡兄の妻を娶るの事（申命記二十五章五節）を特記したる者は適其一般に守るべき者なる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を明にす、中古に於て若干の基督教法典には此制限を三等親外にまで擴めたりと雖も、是れ聖經の明文に依れる者には非ず、

(三)血族と姻族とは同一なる事、此原則もまた本元の古法に根據す、曰く人其妻に合ひ二人のもの一體となる也」(馬太十九章五節)、

以上の原則に本づきて製したる血族及び姻族の等親表は本書の末に之を載す、此の規定に悖る婚嫁に對しては其禮式を執行すべからず、金を納むる者の爲に此の制限を解除するの風は羅馬法王の弊政として輓近設定せられたるものなれば、我等の決して傚ふべき者に非ず、

一たび結婚したる基督教徒間には離婚を許さずとの規則は教會の結婚禮式を以て神の祝福を求むる事の無かりしが爲に動く者に非ず(此禮式たるや固より歎かはしき者なりとは雖も、唯一つの例外は我等の主の勅語に見えたる場合なりとす(馬太福音書十九章九節)、

何等の場合といふも去られたる姦婦姦夫の爲には教會に於て再婚の禮式を執行すべからず、又其本夫又は本婦の存命中は、假令該姦婦若くは姦夫教會外に於て行政的結婚(區役所又は戸長役場に屆けて成せる正式の結婚)をなしたりとても、決して之を容れて聖餐に陪せしむ可らず、

姦婦を去りたる夫又は姦夫を去りたる婦の再び他に婚嫁する事の可否につきては、從來議論多かりしが、之を要するに我等は斯る再婚を奬勵せざるなりとす、斯の如き婚嫁あるに際して教師たる者は若し心に慊しとせずんば何時にても之が爲に結婚禮を執行することを辭するを得べし、然し乍ら信徒にして若し其心に慊しとして斯る結婚式を助成せんとする者あらば、之を禁ずるは宜しからずと我等は信ず、

教會の結婚法はバプテスマ前(受洗前)に取結びたる婚嫁には全然適用すべからず、幸ひにして日本にては風俗及び法律(民法の如き)、許多の緊要なる點に於て我が基督教會の法律と符合一致す、されば知らず識らずして教會法律に背きたるが如き場合に於ては、一々其れ自身の功過を按して處斷するを要す、教會の法律及び責罰は溯りて加ふるを得ず、

基督教徒ならざる男女間の結婚は、基督教徒たる男女間の結婚のごとく其性質に於て不解なる者には非ること聖保羅の言に徵して明らかなりとす(哥林多前書七の十五)然れども該使徒の斷案に依るに、其夫婦中の一人基督教徒と成りたる時には、若し其基督教徒たらざる夫或は妻永く其配偶を保たんと欲するならば、妄りに離婚を之に許すべからず(哥林多前書七の十二より十四)、勿論斯の如き場合に於ては未信者たる夫又は妻その基督教徒たる配偶者にむかひて基督教の信仰または道徳と相容れざるが如き行動を強ひざらん者とす、其基督教徒となれる夫または妻、其バプテスマを受領して後尚そのバプテスマ前に配合したる未信者と夫婦の義務を盡し來りたらば、後日に及びて猥りに該義務を脱せんことを試むべからず、是れ其配偶は彼が爲に基督教徒の結婚と同一なる性質の者となりたればなり、

教會は從來基督教徒と未信者との結婚を常に太く非認したり、聖保羅の語(哥林多前書七章三十九節、哥林多後書六章十四節、七章一節)は斯の如き結婚を禁ずる者と見做して大差なかるべき歟、我等は教會の禮式を以て自由に斯の如き結婚式を執行するを得ず、然れども斯る結婚の起りたる時には、古昔の教會に於ては敢て其夫婦中の基督教徒たる者に陪餐の要件として離別を要求したる事なかりき、「爲すことは之を禁ず、既に爲したるは之を問はず」("Fieri non debuit, factum valet")なる格言に由り、暫く之に陪餐を停止するを以て十分の責罰とはなしぬ、

聖洗志願者にして其バプテスマを授けらるゝの日近きにあらんとする人と結婚するは最も少しく不穩なる事にて、但し斯の如き結婚もまた及ぶ限りは避くべき者とす、特別に監督に稟請することは無くしては斯る結婚式を執行せられざらんことを希望す、

凡そ基督教徒間の結婚式を執行するに當りては、教師諸君は必ず或は親く知り實察し、或は他の教師より書信を得て該婚執行が毫も基督教徒結婚法を破る者に非ることを先づ自ら明らかにするを要す、結婚式を舉行せんとするには須らく少くとも二名の證人の面前に於てすべし、二冊の結婚登錄簿を備へおきて(教會法憲第九條三を見よ)、結婚の際男女兩方の姓名生地年齡住所身分職を記入すべし、此登錄簿には結婚男女兩方、二名以上の證人、及び當局牧師これに記名捺

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

印するを要す、此登錄簿の寫は右結婚男女の求に應して與ふべく、又其一本を監督に呈供すべし、

教職諸師、此件に於ては智慧さ剛毅の賜を要すろことの如何に大なるか、同時に又彼の温柔、禮貌、及び洗脊の精神を要すろことの如何に深きかは諸君必ず之を感ぜらろゝならん、我等もし此精神を養ひて之を顯はすならば其職分を盡すに當りて庶幾くは無用の猜疑或は怨恨を免かれん、即ち我等か宜く取ろべきの進路さ考ふろ所の者は一に職分を盡すの念慮より來れろもの、我等の主の聖旨に副ふさ信ずろより來れろ者にして、唯に眼前に於けろ教會の清潔を保ち進歩を致すに必要なろ而已ならず、亦終には、基督教主義が其當然の結果さして一般に行なはれん時に及びて全國民の社交上に最大の福利を來すに必要なろ者なりさいふ事を人々に感ぜしむろを得ん、豈深く思はざろべけんや、

我等は大齋節中に結婚式を行はざろとを希望す

禁結婚表（左に揭ぐろ所は聖書と聖公會の律法に從ふものなり）

娶ろ可らさろ者

（一）祖母（二）祖父の妻（三）妻の祖母（四）父の姉妹（五）母の姉妹（六）父の兄弟の妻（七）母の兄弟の妻（八）妻の父の姉妹（九）妻の母の姉妹（一〇）母（一一）繼母（一二）妻の母（一三）娘（一四）妻の娘（一五）息子の妻（一六）姉妹（一七）妻の姉妹（一八）兄弟の妻（一九）息子の娘（二〇）娘の娘（二一）息子の息子の妻（二二）娘の息子の妻（二三）妻の息子の娘（二四）妻の娘の娘（二五）兄弟の娘（二六）姉妹の娘（二七）兄弟の息子の妻（二八）姉妹の息子の妻（二九）妻の兄弟の娘（三〇）妻の姉妹の娘

歸く可らさろ者

（一）祖父（二）祖母の夫（三）夫の祖父（四）父の兄弟（五）母の兄弟（六）父の姉妹の夫（七）母の姉妹の夫（八）夫の父の兄弟（九）夫の兄弟（一〇）父（一一）繼父（一二）夫の父（一三）息子（一四）夫の息子（一五）娘の夫（一六）兄弟（一七）夫の兄弟（一八）姉妹の夫（一九）息子の息子（二〇）娘の息子（二一）息子の娘の夫（二二）娘の娘の夫（二三）夫の息子の息子（二四）夫の娘の息子（二五）兄弟の息子（二六）姉妹の息子（二七）兄弟の娘の夫（二八）姉妹の娘の夫（二九）夫の兄弟の息子（三〇）夫の姉妹の息子

時報

◎學校教育

●女生入學の許可　女子高等師範學校に於て府縣選擧生中三十三人を選拔し本月一日試驗生さして入學を許可せりと云ふ其府縣別は左の如し

東京府	三人	山梨縣	二人	和歌山縣	二人
京都府	一人	滋賀縣	二人	香川縣	二人
大坂府	二人	福島縣	二人	愛媛縣	一人
兵庫縣	二人	福井縣	二人	高知縣	三人
千葉縣	一人	石川縣	一人	福岡縣	一人
奈良縣	一人	富山縣	一人	熊本縣	一人
靜岡縣	一人	鳥取縣	一人	鹿兒島縣	一人

●頌榮女學校　芝白金猿町なろ頌榮女學校に於ては去ろ七日本科生並に小學生徒卒業證書授與式施行餘興さして生徒一同の唱歌音樂の催ありしよし

●女子成立學校　同校に於ては去ろ三日淺草鴎遊館に於て第七紀念會及び六回卒業證書授與式を執行し校長棚橋絢子氏の祝辭、卒業諸氏の箏曲、和文朗讀、金井延土子金四郎二氏の演說其他餘興ありて盛會なりし由尙は卒業生は左の如し

高等科全科　花岡梅子、波岡しま子◎高等科の中選科　大給竹子、大給岡子

◎本科全科　相羽政子、大岡よね子、松原きよう子

◎本科の中選科　加藤さみ子、中川しん子、工藤正子、西田孝子、山本千代子

◎大坂高等女學校　市立大坂高等女學校去ろ四日第七回卒業證書授與式を行へたろ由本科卒業生は二十七名、進級生徒總員二百四十八名、保姆講習科卒業生十一名あり姓名は左の如し

佐藤しき、森島小有、寺尾はろ、山中さだ、石川はろえ、生田えつ、横山なろ、勝野こま、渡邊ひさ、金澤くに、永富しやう、西村きく、木尾よし、増羽あい、川崎えい、七里たつ、山本よし、矢野たま、菊川はろ、愛宕つろ、金澤せつ、梶谷しげ、堀田ゆか、西村ふみ、船越よね、岸巨はつ、岩原てい、

保姆講習科

甲號卒業生　梶井ひさ、島中ゆり、紫山たか、志方ふさ、吉岡さも、松下たけ、上村よし、

乙號卒業生　井村すゑ、渡邊さよ、三橋なろ、松島しげ、

●相愛女學校　同校は去廿一年六月大坂津村別院内に設置し假に對面所を劃して教場に充て來りしが爾來入學の生徒增加して狹隘を告ぐるに至りしに付法主より

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

若干金を寄附して其新築費に供し有志者の寄附を併せ昨年七月より同境内の西南隅に地を相して工事を起し本年二月竣成せしも器具萬端不揃なりし爲落成式を擧くるに至らざりしが頃日悉皆完備せしに付七日新築落成式を擧げ法主臨場あり翌八日入佛會を執行し十一日開校式を擧げ翌十二日より授業を始めんとす同校は女子の普通教育を主とし昨年より高尚に過ぎたる學科を除き專ら實用有益の科目を授くる事とし今回新築の教場には裁縫場の外割烹、庖厨等の室をも設けありと大坂朝日新聞に見ゆ

●女子部廢止論の影響　松江市の「松江日報」論して曰く當市並に附近に於ける高等小學校在學の女生徒は本年に至り頓に其數を減少し高等科女子教育の勢ひ酷だ不振の兆候を呈せり今其の原因の如何を探究するに之れ全く縣會の一部が連年唱ひて歇まざる師範學校女子部廢止論の影響にして現に昨年の如きは一度縣會の多數を以て遂に廢止の不幸を蒙らんとしたるも知事の不認可により辛うじて其の命脈を維持したる程なれば今后とて又々斯る不稽の議論縣會の多數を制せざるにも限らざるべく若し此の勢ひにして底止するなくむば女子部の運命も思ひ遣られて頼もしからず是を以て世の父兄たるもの其子女をして教育に從事せしめんと欲するもの又は自ら進んで賢母たらんと欲するものは先づ師範入學の階梯として悉く高等小學校に入學するを以て恒とせしが近頃頼み難き女子部の運命に落膽し早計にも女子部は早晩廢校の不運に遭遇すべしと思惟し未だ入校せざるものは之を見合せ已に修學しつゝあるものは中途にして退校し裁縫其他手工の如き女子が處世に必要欠くべからざるものを修めんとするもの多きにより遂に今日の有樣を呈したるに外ならざれば其の原因全く女子部廢止論の影響と云ふ蓋し不稽の者にはあらざるべし世王侯將相の高位を望むで國事に奔走し政治に碎膽するもの其數幾百なるを知るべからず而して其の希望を達し宿志を遂ぐるものに至りては實に寥々曉の星も啻ならずと雖も然れども之が爲め政治の發達人智の進化事業の進歩するもの蓋し尠少にあらざるべし世陶朱猗頓の富を欲して拮据勉勵星を戴き月を踏むもの其の數幾百万なるを知るべからず果して其の之を得るものに至りては又實に微々憐むべきもの少數なるべしと雖も然れども之れが爲め産業を發達し國富を増進する蓋し尠少ならざるものあり今夫れ女子部の縣下女子教育に於ける輙か之に類するものなしとせん戲語贅茲に至りて愈々女子部存置の必要を感ず彼の縣會議員就中常置委員の或る一派が頻に女子部全廢を説くもの猥りに經費節減に眩惑して事の茲に影響すべきを知らざるに關するのみ又憐むべきの至りならずや望らくは職を縣會議員に列するもの須らく考一番せよ斯くても爾等は猶ほ且つ飽まで議會に全廢を主張せんとするかと

●彦根町立女學校　同校は本年度より高等女學校に引直さん事となり同校准訓導一名を教授法研究の爲東京へ留學せしめんことをも決議したりと云ふ

◎片々

●女學生の洋行　宮城女學校生吉田たつれ子（埼玉縣南埼玉郡出羽村吉田榮三郎長女）は學術修業の爲め今北米合衆國。ペンセルバニヤ州へ渡航する由にて去る四日其筋より旅行券を下渡されしといふ

●身体髮膚の東西比觀　『日本』新聞紙上に、先頃より東西比觀と題し、風俗の彼我相異なるものを掲げそめぬ。去る五日の同紙上、身体髮膚に就きて比觀せる所面白し、曰く

●髮　は婦人の容姿を資くるの一なり、我に在りては其色黑きが上にも黑きを尙ふなり、碧髮といひ黑髮といひ或は「鴉の濡羽色」といふ皆此意なり、西洋に在りては之に反し、其の色淡黃を尙ふなり、故に彼は美人の髮の極美を稱すれば即ち「黃金」（ゴールデンヘーヤ）髮といふ。扨男子の髮容は彼れは一般に斬髮し、我れは普通に曾て椎髻せし、便利よりいへば斬髮可なり、天物を暴殄せざるよりいへば椎髻善し

●眉　西洋の女性は老幼となく眉を剃らず、我國の婦人は歸嫁の後ち曾て之を落したり、天物を暴殄せざるを善しとすれば西俗優れり、吾は西俗に從はん、是に至りて思へ、椎髻なか〳〵面白し、芳野世經君確として所見あり、

●齒　往昔我國の婦娶たる女性は皆齒を染めて涅くしたり、西洋は即ち否らず、是れ亦西俗に左袒せん、瑞々しき皓齒は明眸と共に人爲を假らずして美言ふ可からず、ペルリが日本紀行に美婦人ありと雖も吾は接吻の嗜を懼るといひしは無理ならず、

●耳　西洋の婦女子は一般に耶環を穿つ、假令其飾は珠玉にせよ金剛にせよ、是れこそ眞に野蠻犬戎の遺風なれ、彼等が先祖の所思ひ遣らる、顧みて同族に視れば天地開闢以來曾て此俗なし、尙ふ可きかな、但し一種の人間は西俗とさへ言へば、何にても文明なりと心得ぬ、若し是なしも文明なりとせば蠻附たる蝦夷のアイヌは我同族よりも文明ならん、現にアイヌの婦女子は耶環を穿つが故に

●胴　西洋の婦人は胴を細小ならしめんが爲めに、之を締むるに「コーセット」を以てし、殆ど一種の不具體を造る、其愚支那婦人の足趾を細小にせん爲め緊束して蓮歩となると五十歩百歩のみ、我國にては亦絶えて此風なし、然るに我社會の一部には好んで生れもつかぬ片輪になりたがる者あると聞く、哄笑々々

●腰　我は細腰を尙ひ、彼は臼腰を喜ぶ、或人曰く臼腰を喜ぶの意は利學正宗の編者に問はゞ分る可しと、或は然らん、ついでもあらば問ひ試むべし

●故桐野氏母堂の逝去　薩南の猛將故桐野利秋氏の母堂は去月二十八日郷里鹿兒島にて八十五歳を以て逝去したる由

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子腓立比物語

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅　金六錢

今を距ると六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隷に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛を感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け又船長の助言により腓立比基督の信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督教徒なると露見し、殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を省みるに至り、後又隊商等がアラビヤのベドウィン族に剽掠せられ囚虜となりし時、腓立比も亦囚人となり、爾後幾多の艱難變遷ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遇ひ大失望したりしも、圖らぬ助けを得て遂に兩親を奴隷苦役の中より十二年目に芽出度救ひ出しぬ。

朝野新聞の評　櫻井明石氏重譯　希臘孝子腓立比物語

是れ記者が三年の歲月を閱みして經營慘憺の間に成れるもの宜なり卷中の人物躍如として其の眞を斷はし一讀の下人をして感慨激勵嗚咽の情に堪へざらしむるや、驟りて想ふ我れの國を建つる玆に三千年其の間忠臣あり義士あり烈婦あり貞女あり善く世道の綱季を拒きしか今や人心維れ危く道心維れ微なり想うて玆に至れば余輩豈に感慨なきを得んや」女學雜誌社主は道德卓行の士なり。滔々たる天下輕薄是れ追ふの時に於て彼れは獨り万斗の熱涙を灑いて世の信仰ある德義あるの士女に同情を表せり而して今此孝子の蹟を梓して世に行はんとす彼れの意を用ゆる深しと云ふべし

發賣所　東京神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本校[illegible]四月[illegible]入[illegible]
明治廿七年四月　東京市[illegible]町[illegible]番地
明治女學校

評論

第十二號目次

三月廿五日發兌

●春遊　隠花生
●宗教上の東方問題
●鐵血翁と老西郷
●開國條約改正論
●感激獻身
●客氣、義侠、平凡大王
●社會學史上スペンサーの地位　小川靜(?)
●岐阜縣治水策　齋藤音作
(○[illegible]林制度○諸林制度○民林制度○山役人○山林保護○牧畜後の山林荒廢○諸工業の隆盛○田畑宅地[illegible]畑の増加○山増加○生計の困難○郡内[illegible]の缺乏)
●大勢一觀
議院大人
大勢は濶歩直行す　巨(?)堂
●破れ家のつゞくり話を讀む　磐松子
●深見笠を讀む
●濠洲クインスランド　山下好民
●女學斷片を讀む　撫象子
●伊太利の現狀　末摘花
●聯立內閣未可成論
●內大臣德大寺卿を懷ふ　王(?)臣某
●花を待つのおもひ　稚翁

發賣所 女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊半年分	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊一年分	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候
一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らず

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

品取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割増五厘切手に限るにて申受け候。
一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御申越への事。

東京市神田區表神保町六番地
發賣所 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年四月十三日印刷
明治廿七年四月十四日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
印刷所　牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)